

播州名松めぐり

(1)高砂神社

今から約 1700 年前、神功皇后が三韓征伐からの帰途、鹿子水門（かこのみなど）に停泊され、この地に国家鎮護のために大己貴命（おおなむちのみこと、大国主命の別名）を祀られたのが始まりと寺伝にある。

「高砂や～この浦舟に帆をあげて～」で知られる謡曲「高砂」の発祥の地である。

①相生の松

創建間もなく境内に生えたのが、この相生の松だと伝えられている。

一本の根から雌雄の幹が左右に分かれた松のことで、ある日「尉と姥」に姿を変えた伊弉諾尊と伊弉冉尊の二神が現われ、「我は今より神霊をこの木に宿し、世に夫婦の道を示さん」と告げたことから、霊松として人々の信仰を集めるようになった。

現在の松は 5 代目である。

初代……天禄年間に枯死

2 代目……秀吉の三木城攻めの際焼失

3 代目……姫路城主本多忠政が植え、大正 13 年（1924）に国の天然記念物に指定された。樹齢 300 年以上を経た昭和 12 年（1937）に枯死

4 代目……松くい虫のため短命



②霊松殿

昭和 12 年に枯死した 3 代目の幹が保存されている。



③尉姥神社

伊弉諾尊と伊弉冉尊をご祭神として祀っている。

「お前百まで、わしゃ九十九まで」と歌われる「尉と姥」は平和と長寿の象徴として信仰されている。尉は福をかき集める熊手を、姥は家内を清めるために掃くほうきを手にしている。

④御神木「いぶき」

謡曲「高砂」の登場人物である阿蘇の神主友成が上京の途中、高砂の浦に立ち寄り、杖にしていた木を地面に突き刺したところから発芽したといわれ、樹齢 1000 年を超えるとか。

⑤工楽松右衛門像(1743~1812)

高砂東宮町に生まれ、若くして兵庫津に出て、船乗りになる。幼少の頃から改良や発明好きだった松右衛門は、それまでの脆弱な帆の布のかわりに播州木綿を使った厚地大幅物の帆布の織り上げに成功した。「松右衛門帆」と呼ばれて、広く公開し、全国の帆船に用いられるようになり、日本の海運技術の向上に貢献した。

また、松右衛門は幕命により、ロシアの南下への対策として千島の択捉島に埠頭建設を命じられる。厳寒の地での厳しい工事を見事完成させた。さらに函館にはドックも造った。

これらの功により、「工夫を楽しむ」という意味の「工楽」の姓を与えられ、その後も優れた築港技術者として活躍し、高砂港や鞆の浦防波堤などにその足跡を見ることができる。

高砂神社境内にある銅像の右手はどこを指しているのか？一説によると、彼の指は択捉島を指しているとか。



⑥「池田輝政公高砂城址」の石碑

- ・天正 6 年（1578）秀吉の三木城攻めの際、三木陣営に与していた梶原影秀の高砂城は秀吉の軍勢に攻められて落城した。毛利から兵糧を三木城に供給する重要な拠点であった。
- ・慶長 6 年（1601）姫路城主の池田輝政が高砂神社を西北の松林に移転させ、その跡地に海の守りとして高砂城を再建した。
- ・元和 3 年（1617）姫路城主となった本多忠政は幕府の「一国一城令」のため高砂城を廃城とした。その後、寛永 2 年（1625）に高砂神社を元の場所に再建した。この時に相生の松の後継樹や社領 30 石を寄進した。



(2)工楽松右衛門旧宅

約20年間空家となっていたが、2016年子孫が土地、建物を市に寄贈した。市では街歩き拠点として活用するため、老朽化していた建物を約1億4千万円かけて改修、公開した。

旧宅は江戸時代後期に建てられた木造二階建て。1階は井戸や炊事場のほかに9部屋、2階は7部屋ある。土間の吹き抜けには構造材に松などが使われ、木の湾曲が味わい深い趣を演出している。2階には版画家棟方志功らも訪れたとされる板敷き洋風の応接間があるほか、幕末期の工楽家周辺の様子が見られる模型など展示されている。

また建物周辺は堀川船着き場の遺構や歴史的な街並みが残っている。



(3)尾上神社

祭神は、海の神様である住吉大明神である。神功皇后が航海の無事を住吉大明神に感謝したことにより建てられたとされている。

①尾上の松

一つの根から男松（黒松）と女松（赤松）が生えている姿は霊松として信仰を集めており、謡曲「高砂」に謡われている。文化元年（1804）に摂州から播州に至る各地名所を図で著した「播州名所巡覧図絵」にも名所として紹介されている。

現在の松は7代目である。



②片枝の松

神功皇后のあとを慕って、枝葉ことごとく東に向かって張ったといわれる。その形状はあたかも龍がうずくまった様に見える。

現在の松は3代目である。



③尾上の鐘

この鐘は神功皇后が三韓から持ち帰ったものと伝わるが、実際には11世紀前半頃の朝鮮の鐘であり、大変貴重なものである。国の重要文化財に指定されている。

この鐘には、蓮の花に乗った如来を中心に、その上に天界と六つの小さな楽器が描かれている。また、左右には天女が衣を翻し楽器を奏でながら、天から降りてくる様子が刻まれている。

「播磨鑑」には次のような話が載っている。

その昔、この鐘は海賊によって盗まれた。足摺岬まで船で運ばれたが、大嵐になり船が沈みそうになり、海に沈められた。近辺の海では夜中になると海中が光ったため、漁ができなくなった漁師により引き上げられた。その後、高野山に奉納されたが、鐘を撞くたびに「おのえへ、いの～」と聞こえたために、尾上神社に戻されたという。

鐘には小さなひびが入っており、残念ながら鐘の音を聞くことはできない。



(3)浜宮天神社

主祭神は菅原道真である。延喜元年(901)大宰府に左遷される折、この地に立ち寄り松を植えたとされる。道真の死後、道真を慕って、松の近くにこの神社が建てられた。

加古の浜松(菅公の松)

菅原道真が左遷の途中にこの地に立ち寄り、海上の平穏と万民の幸福を祈願して松を植えた。この松は枝葉が南西に伸び、はるか道真永眠の地、九州大宰府を指しているといわれる。

残念ながら初代の松は明治の初めに枯れてしまい、現在2代目で、樹齢550年といわれている。



(4)浜の宮公園

昔「播磨国風土記」では「賀古の松原」と言われたこの地に加古川市の木「黒松」が群生する公園がある。15.9haの公園には多目的グラウンド、市民プールや自由広場などがあり、市民の大切なレクリエーションの場となっている。

もう一つ忘れてはならないのは戦争遺産の存在である。昭和12年(1937)陸軍加古川飛行場(尾上飛行場)が完成。戦争激化とともに陸軍航空通信学校尾上教育隊が開設され、浜の宮公園に多数の兵舎が建てられた。終戦後全て取り壊されたが、戦争を忘れないための遺産として、門柱や基礎などの遺構が保存されている。

(次回予告)

2023. 2. 25

兵庫史を歩く No. 33 小野藩陣屋町のひなめぐり

圧巻！650体のひな人形が一堂に